

早春の尾瀬

下界は日差しが強く汗ばむ陽気で初夏の季節が進んでいたが、標高千四百㍍の尾瀬ヶ原の五月の半ばはまだ早春のまつ只中である。夜明け前の寒さで外に干した濡れ手拭が板のようになつて氷点下まで気温が下がつたことを示していた。

湿原を囲む山々は雪が豊富に残り、その山々を背景に雪解け直後の冬枯れの下草と白樺林の早春の薄い芽吹きの広がりが美しい対比をみせていた。それでも日差しだけは春を通り越して、尾瀬ヶ原を貫いている木道を暖め、両側にはミズバショウの咲き始めの白い小さな可憐な花やリュウキンカの黄色い花の群れが一所懸命に咲きだし二本の木道に寄り添うように続いていた。冬枯れの野を見渡すと、雪解け水を豊富に集めて湿原を流れる川の両側には、すでに一面

のミズバショウの花の群落が広がり、溢れた雪解け水の冷たく透明な流れに水中花のようないゆれていた。背景には至仏山が残雪を抱き女性的な佇まいに静かに座り一瞬の時が止まつたような錯覚に捕らわれる。湿原のむこうの山裾に広がる白樺林の白い幹の群れの上に春の芽吹きが、柔らかな陽差しで、一見すると夕暮れ時の逆転層にたなびくカスミをかけたように広がつていた。朝陽の中での同じ情景で、まさに新芽の芽吹き直後の淡い色をハケで横にすこと描いたように山裾を飾つていた。

今年の尾瀬は真冬の雪が少なく、三月から四月にかけて記録的に暖かく雪解けが早く進み過ぎてミズバショウの見頃も例年の六月初旬より一週間以上早まりそうである。昨年冬は越冬した小屋の記録で五ヶ月を超して十年ぶりの豪雪となり、この豪雪と春先の低温続きで雪解けが大幅に遅れて六月に入つても湿原の雪が消えなかつた。この二年で両極端の気候が現れ、尾瀬に咲く早春の花にとつてひと月近い差がでいるだろう。厳しい自然の中でぎりぎりに生きている湿原が冬の記憶を色濃く残す残雪と春への移ろいの季節の進みを單に正直にみせた姿であろうが、これが平年や昨年を基準をもとに組まれた尾瀬めぐりに人たちをあわてさせている。今年、尾瀬に行きなら早めがよい。
(村松 照男)

